

# Mesopotamia における帝王陵の成立<sup>1)</sup>

小野山 節

## 1 帝王陵と Mesopotamia

古代には支配者の埋葬にさいして、地上に巨大な建造物を造営した場合がひじょうに多い。とくに Egypt の Pyramid, 中国における秦漢諸帝の王陵, 通溝付近にある高句麗時代の將軍塚や大王陵, 朝鮮では慶州の新羅統一時代の王陵, さらに応神陵, 仁徳陵に代表される日本の前方後円墳<sup>2)</sup>などが著しい例である。そしてこれらの墓は, 古代国家における支配者たちが, かれらの権力の強大さを誇示するために, 多大な労働力を駆使してつくりあげたものと, 一般に考えられている。

上に挙げた地域の歴史をみると, このような巨大な墓の出現は, 古代統一国家の成立と少くとも時期的に関係があるように思われる。そこで, 各地域におけるこの種の墓を総括して「帝王陵」とよぶことにしたい。

帝王陵の果たした歴史的役割とか, その性格についての, 上述の諸地域にかんする全般的な検討は別の機会に譲ることにして, ここでは主に Mesopotamia の帝王陵を問題にする。Mesopotamia の帝王陵というのは, Ur 第三王朝の諸王の墓のことであって, 従来, 古代の支配者の墓について論じられるときでも, ほとんど考慮をはられなかったものである。極端な例を挙げると, H. Frankfort は古代 Orient の美術と建築を概括的にとりあつかった書物<sup>3)</sup>において, Ur 第三王朝の帝王陵を完全に無視してしまったほどである。このような風潮が起つたのは, Mesopotamia の墓が, Egypt, 中国, 朝鮮, 日本などのように, その巨大な姿をちよくせつ見せつけるような形で残存していなかったことにも, その原因の一部はある。しかし根本的な原因は, 来世の存在にかんする信仰が Mesopotamia にはなかったという偏見を, 多くの学者がもっていたからであろう。1927年から1932年にかけて C. L. Woolley が Ur の王墓や第三王朝の帝王陵を発掘していごにも, かれらは屍体を埋葬したものと認めず, 豊饒を祈願する祭のさいに用いられた建造物であると考えた<sup>4)</sup>のである。かれらの主張の根拠は, 来世にかん

## Mesopotamia における帝王陵の成立

する記載が Sumer や Akkad の文献には認められないという点にあった<sup>5)</sup>。このため、Ur の墓を発掘した Woolley も、Ur 第三王朝の帝王陵ならびに王墓を Mesopotamia における例外的な存在と考え続けてきた<sup>6)</sup>。さらに被葬者が手に持っていたコップを、彼岸への旅の途中にだけ必要なものと解釈して、彼岸そのものの存在を示すようなものは何もなく<sup>7)</sup>と、こじつけて説明せざるをえなかったほど、それほどこの偏見は学者の思考を害していた。死者たちは彼岸の存在を信ずればこそ、必需品をもって旅に出たものと考えられるのに。

このような偏見にとらわれない考え方もつ学者は<sup>8)</sup>もちろんあった。にもかかわらず、かれらの論著が十分に説得力をもちえなかったのは、Ur 第三王朝の帝王陵が出現する以前の段階の埋葬法が、帝王陵の成立の過程として理解されていなかった、すなわち歴史的発展の姿としてえがきだされていないことに基因しているように思われる。まず第1に、発掘者である Woolley が、Ur の王墓を Mesopotamia においては例外的な存在であると考え続けていたこと、第2に王墓全体の編年的位置づけが古すぎて、合理的でなかった<sup>9)</sup>こと、第3には Ur の王墓群における埋葬順の考察が逆であったために、王墓の変化する過程を具体的に示すことができず、したがって、その歴史的意義を理解することを困難にしたことが主要な原因であろう。

第1の点については、C. J. Gadd 教授のように、犠牲者をとまなう Ur の王墓を、Mesopotamia では例外的な現象と、現在なお考えている学者もある<sup>10)</sup>が、V. G. Childe が早くから強調したように<sup>8)</sup>、Ur の王墓に類似した葬法は Kish Y 地区の墓地<sup>11)</sup>にも認められるところであって、Ur の王墓は決して例外的なものではない。第2の点は Frankfort によって修正された<sup>12)</sup>。すなわち、Ur の王墓は初期王朝III期後半に編年的位置を与えられ、この方がいっそう妥当性を有するものとして一般に認められるようになった<sup>13)</sup>。Frankfort 自身は Mesopotamia に王墓が存在することを認めなかった<sup>14)</sup>けれども、かれが Ur の王墓を初期王朝III期に編年したことの意義は大きい。この時期は、歴史的にみると Mesopotamia に統一国家が出現する前夜ともいべき変動期にあっている。この成果を背景とし、さらに第3に挙げた王墓の埋葬順を、Woolley とは反対に考えることによって、Ur の王墓にみられる構造上の変化の歴史的意義がはじめて理解されるのである。Ur 第三王朝の帝王陵の成立は、Mesopotamia 初期王朝期の墓地における王墓の存在を確認し、初期王朝末期における王墓の構造上の変化を追跡することによって説明できる。資料の不足から、今日の段階ではなお断続的であるけれども、重要な変化のポイントだけは、かなり明確に把握できるように思われる。

ここで、「王墓」というのは、ある墓地において、他の多くの墓と違った特殊な構造をもっているか、あるいは特別な副葬品をもつ墓をさしている。Ur で発見された墓地を例にとると、Woolley は発掘した形のわかる墓の総数 1850 のうち 16 を王墓 Royal Tombs とし、他を民衆の墓 Private Graves と考えた<sup>15)</sup>。民衆の墓<sup>16)</sup> というのは、装身具をつけた屍体をマットで包み、平均 150×70 cm の長方形のマットを敷いた堅壙に、直接あるいはマット張の棺、陶棺、木棺などに収めて葬り、1 つのコップをもたせ、容器、利器、印章などの副葬品を棺の内外にそえてある。個々のものに多少の変化は認められても、これが一般の葬法であって簡単なものである。これに対して王墓<sup>17)</sup> と考えられたものは(第 2, 3 図)、大きな堅壙のなかに、石灰岩か煉瓦で構築された墓室をもち、とくに金銀器を含む豊富な副葬品をともっており、そのうえ多数の犠牲者が殉葬されているという複雑な葬法であって、民衆の簡単な墓と対照的である。どの墓地においても、このように顕著な形で相違が認められるというわけではないが、同様な事実は他の地域、例えば Saqqara の Mastaba を主体とする墓地<sup>18)</sup> や安陽侯家荘の王家の墓地<sup>19)</sup> などでも認められるのである。

いま問題にしている地域、Mesopotamia の古代文明の根底となったのは Sumer 文化であり、Sumer 文化を創造したのは、いうまでもなく Sumer 民族であった。ところが、その Sumer 民族の実体についてはほとんど分っていない現状である。また、かれらがいつごろから、南部 Mesopotamia の Sumer の土地に住みはじめたかについても、多くの見解が対立している。ただ初期王朝期の高度な文化が、Sumer 民族によって作りだされたものである点については、多くの学者の見解が一致している。さらに、この時代の文化の基調をなしていたのは Sumer 語であり、Sumer 語の最古の資料と考えられる Uruk 発見の象形文字が、Uruk IV 層の時期にはすでに存在していたのであるから、かれらの到来は少くともこの時期以前に求めるのが合理的である。この論文では、Jemdet Nasr 期から Ur 第三王朝にいたる期間を問題にする。したがって、この時代には、Sumer 人は南部 Mesopotamia に定住しており、その多くは都市生活を営んでいたと考えてよい。

ところが、このころ Kish や Mari には Akkad 人が居住していたし、Mesopotamia に最初の統一国家をつくった Sargon も Akkad 出身であるといわれる。たしかに南部 Mesopotamia の北部には Akkad 人が住んでいたが、かれらは早くから Sumer 文化の影響をうけて Sumer 化していたばかりでなく、Sumer 文化の高揚に寄与した点も少くなかった。少くともかれらには、対 Sumer 意識は顕著でなかったように思われる

## Mesopotamia における帝王陵の成立

ので、この時代は南部 Mesopotamia が一つの文化圏に含まれていたものと考えて、以下の論述を進めることにする。

## 2 王墓の出現

Mesopotamia で王墓が始めて認められるのは、Kish においてであって、この王墓は発掘者によって Y と名づけられた地区の墓地にある。この墓地は初期王朝 I 期に属する<sup>20)</sup>ので、この王墓の特性を述べる前に、まず初期王朝期に先立つ時代の墓地がどのような状態であったかを瞥見しおこう。

Jemdet Nasr 期の墓にかんする資料はすくない。散在的な墓ではなくて、集団の墓地の状態を知ることができる遺跡を選ぶと、さらに稀であって、いわゆる Ur の王墓の西南に接した地点だけである<sup>21)</sup>。ここでは4ヵ所のピットにおいて、約350の墓が密集し、相重なって発見された。遺骸はほとんど全部が、ほぼ1体をいれるに足る壜に、極端な屈葬の姿勢で、直接あるいはマットにくるんで、土器、石製容器、鉛製容器、玉飾などととも葬られていた。柳行李のような棺に収められた墓が唯一の例外として認められた<sup>22)</sup>にすぎない。しかし、この墓の副葬品は他の墓の場合と同じように、鉛製容器、石製容器、土器、玉飾などであって、特異な点は認められないので、現在の段階では墓地の資料がひじょうに少いけれども、Jemdet Nasr 期に王墓はないと考えざるをえないのである。

Kish Y 地区の墓は、すべての墓室の天井が崩れ落ちていたために、その架構法は明らかでないが、残存していた煉瓦から vault 式架構であったと考えられる。大部分の墓では、1体を収めるにたる広さに、煉瓦か土器片を敷き固めて床をつくり、その上に屈葬の姿勢で、装身具をまとい、手に1個のコップをもってマットに包まれた遺骸が、壜、斧、印章などをまわりにともなって葬られていた。このように、1墓室に1体を埋葬するのが通例であるのに、豊富な副葬品をもっている墓のなかには、数体を収めた例が3墓ある<sup>23)</sup>。Y 237, Y 357, Y 529 号墓がそれである。例えば Y 237 号墓では6体の遺骸が確認されていて、そのうち5体には通常の埋葬の必需品がそえられていない。この事実から、この5体は主人の葬送にしたがって葬られた犠牲者であったと考えることができる。この3墓が王墓であって、一般の墓では発見することのできない四輪戦車1輛<sup>24)</sup>とそれをひく2対の動物、動物を駆るのに使う刺棒の金具、銅製鋸などが墓室のなかにあった。王の葬送に使用された戦車が、そのまま埋葬されたものと考えられる。

車を葬送に使ったと思われる墓は Susa でも発見されている。主人を埋葬した、豊富な副葬品をもつ墓から約 1.5 m 離れたところに、2 匹の牛と人骨 1 体を、わずかな副葬品をそえて収めた壙がある<sup>25)</sup>。この墓に付属する車が確認されていないうえに、墓の構造が Kish の王墓と多少こととなっているけれども、主人の葬送に車を引いたものが、墓の近くの壙に葬られたものであることは明らかである。これも王墓と違って差支えなからう。さらにこの王墓から発見された土器の 1 つには、車による葬送を表現したらしい場面がある<sup>26)</sup>。同じような場面が Khafaje 発見の Scarlet Ware にもえがかれている<sup>27)</sup>。この Scarlet Ware は初期王朝Ⅰ期のものであり、Susa の例は Susa D 期に属するもので、Susa D 期は Mesopotamia の初期王朝Ⅰ期に並行する時期とされる<sup>28)</sup>。Kish の王墓から発見された車や、Susa と Khafaje の土器にえがかれている車による葬送の場面から、王の葬送に戦車を使用する風習が、初期王朝Ⅰ期に Mesopotamia とその近辺において、かなり広く行われていたものと推測される。

次の初期王朝Ⅱ期については、王墓が発見されていないので、この時期に王の葬送がどのような形で行われたか明らかでないが、Ⅲ期に属する Ur の墓地でも、車による葬送の風習を継承した王墓があるので、Ⅱ期の葬法は、基本的には Kish の王墓のそれと同形式であったのではなからうか。後日の発見を待つことにして、Ⅲ期の王墓に移ろう。

### 3 王の葬送儀礼の変化

Woolley は Ur の墓地において発掘した 1850 墓のうち 16 を王墓と認め(第 1 図)、その埋葬順として、1236 号墓から 800 号墓へ方向、すなわち墓地の南西から北東へ方向があったように考えた<sup>29)</sup>。その根拠となったのは墓室の天井の架構法と墓室構築の材料および装飾材であるが、この根拠ははなはだ薄弱であるように思う。むしろ Woolley が示したのは逆の方向に、もっと合理性があると考えるので、以下にその理由を示そう。

Ur の墓地でも、他の地域の古墓と同様に、ほとんどの墓が盗掘されていた。そのなかで 800 号墓と 1054 号墓(第 3 図)の 2 墓は幸にも盗掘を免れて、当時の葬法をかなり明確に再現することのできる資料を提供してくれたので、盗掘されていた他の王墓の残骸を、この 2 王墓の構造と照合することによって、各王墓の葬法を复原することが可能となった。前後関係を決定するための基準となるこの 2 墓に、盗掘されていたけれども、その構造が比較的よく分る 789 号墓と、これらの 3 墓と少し違った構造の 779 号墓とを

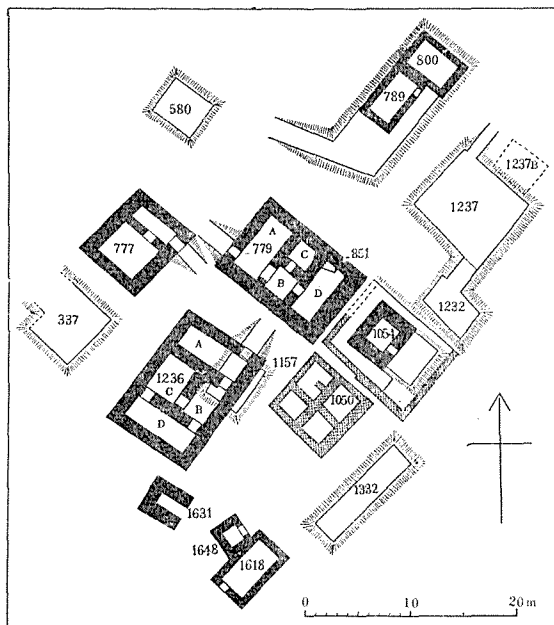
加え、墓全体の構造とか、墓室の構築法、副葬品について比較検討してみたい。

779号墓<sup>30)</sup>(第1図)北西に  
 竪坑をもつ大きな竪坑の全域  
 に墓室が構築されていて、竪  
 坑道では10本の銅槍と遺骸の痕  
 跡が発見された。墓室天井の  
 うえ 1.5 m に石灰岩と煉瓦  
 の遺構が認められた。これは  
 中間構造が破壊されたもので  
 であろう。竪坑のなかで発見さ  
 れた 851号墓<sup>31)</sup>はおそらく高  
 官の殉葬者のものであろう。  
 その殉葬者にはさらに犠牲者  
 がそえられてあった。

墓室は石灰岩を架構して 4  
 室につくられ、両側の A と D  
 は corbel vault, 中央の B と  
 C は笠石のある dome 架構で

ある。4室とも arch 式の入口によって連絡され、A は通路であると同時に埋葬所であ  
 って、5つの凹みがある。中央の凹みには棺がおかれたのであろう。Bからは2、3の  
 玉飾が発見された。Cは主人を埋葬した部屋で、Aと同じく5つの凹みがあり、中央に  
 主人の棺が安置されたものと考えられる。南の隅に1体分の頭蓋骨が発見された。D  
 は有名な Standard を出土した室で、6体分の人骨が検出されている。

この墓に付属すると考えられる 1237号墓<sup>32)</sup>は死坑である。これは北隅に竪坑をもつ  
 竪坑で、竪坑底も竪坑壁も泥で塗固められ、ともにマットで覆われている。その上に犠牲者  
 がほぼ5列になって、北西から南東の方向に並んでいる。各犠牲者に属する装飾品い  
 いでは「叢林にかかりたる牡綿羊」2、リラ3などが主なものである。この竪坑の南西  
 部には、戦車、牽引の動物の御者、容器、道具類などが発見された 1232号墓<sup>33)</sup>があ  
 って、その竪坑道が 1237号墓の南隅において、竪坑底差わずか数センチで接していること、  
 さらに両竪坑の遺物がお互に他を充足するような内容のものであるという点などから、  
 1232号墓は 1237号墓の一部で、この両墓はともに 779号墓に付属するものと考えられ

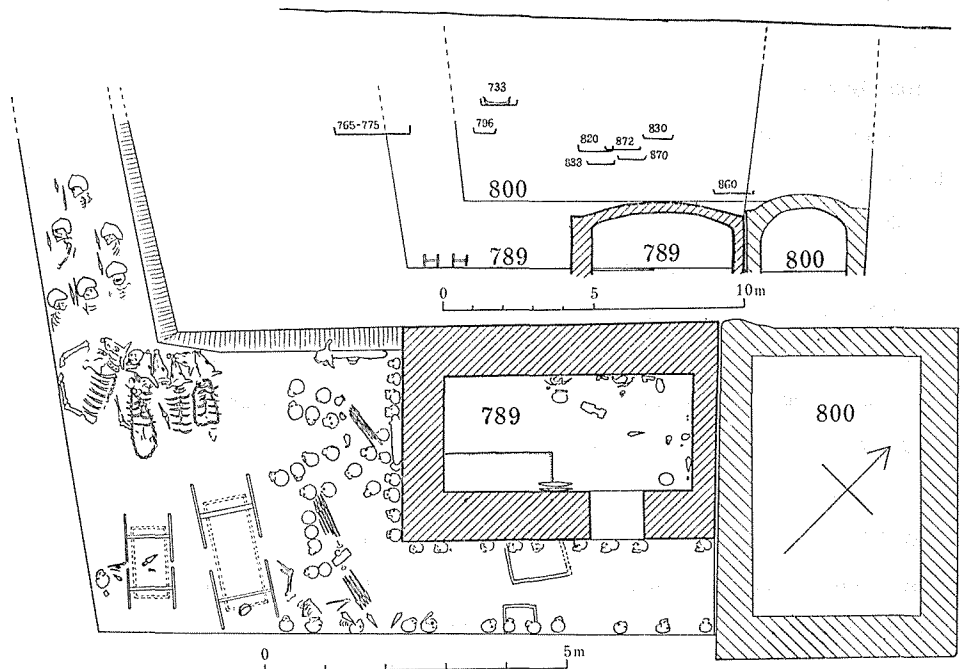


第1図 Ur王墓の位置 (Ur Ex. II, Pl. 273 による)

る。墳底上 3.6m には供物台があり、少し下に煉瓦、石灰岩の遺構が発見され、それがもと豎墳の中間にあって、豎墳をいくつかに区劃していた壁の遺構であることが認められた。2つの区劃からは犠牲者が、東隅からは火を焚いた跡が発見されている。

789号墓(王 A-bar-gi の墓)<sup>34)</sup>(第2図) 北東から南西に長い 10×5 m、深さ 8.3 m の豎墳で、北西からゆるやかなスロープをなして下降してくる墳道が西隅についている。墳底の北隅長辺ぞいに墓室がつくられ、墳底の他の空間は死坑に使用されている。死坑から発見された主なものは、墳道の近くに戦車 2 輛、6 頭の牛、2 個の手綱通し環、牛の頭部に 1 体、戦車の側に御者各 1、リラ 2、束ねられた槍類 3 ヲ所などで、墓室の入口近くに木箱 2、犠牲者は墳道の灌奠坑のそばに 6 体の兵士、豎墳の南東壁にそって男 12、墓室の南東壁にそって男 9、墓室の南西壁に装をこらした女 12、戦車と墓室との空間に 21 で、総計 63 体ある。

墓室は石灰岩の粗石で高さ 1.5 m の壁をつくり、煉瓦を一行ならべ、その上に煉瓦を放射状に配列して barrel vault の天井を架構したものである。arch の入口が南東壁にあって、壁の表面は内外とも泥で塗ってある。粘土を固めてつくられた床の南端に



第2図 Ur 789号墓 (Ur Ex. II, Fig. 10 と Pl. 29 による)

## Mesopotamia における帝王陵の成立

凹みがあって、王の屍体はここに安置されたものと考えられる。入口に接して銀のポートがあり、並んで銅のポートの痕跡が発見された。容器、金銀製の装飾品、武器、遊戯盤などが散乱していた。

**800号墓** (王妃 Shub-ad の墓)<sup>35)</sup> 不整形な竪壙で大きさは789号墓と大差がない。東側中央部に南東からスロープしつつ下降する竪道がつけられ、北東隅に墓室がつくられている。墓室を789号墓に寄添わせてつくったために、死坑と天井の上頂が同一の高さにある。死坑から発見された主なものは、王妃にふさわしい大きな衣装箱、車輿と牽引の動物、手綱通し環、ハープ、遊戯盤、化粧箱、多数の金銀石製容器類、犠牲者20体などで、竪道に灌奠坑と剣をもった兵士5体と土器とがあった。

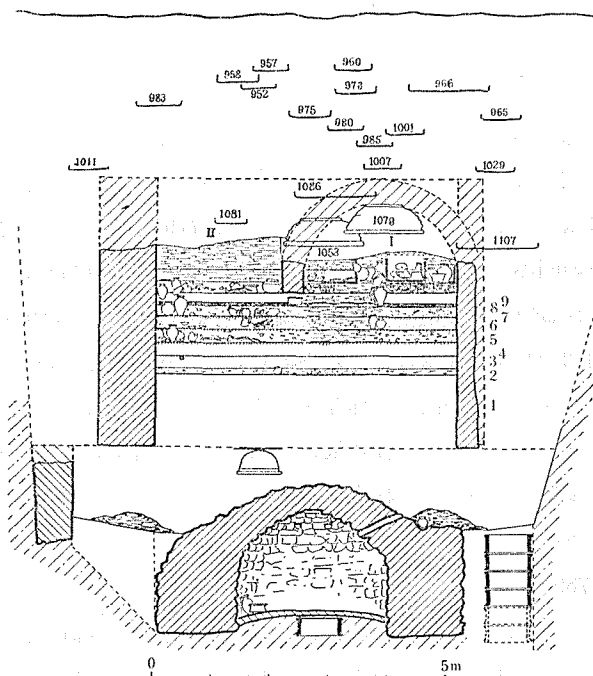
墓室は789号墓と同じつくりでやや大きい。内壁面は泥を塗り、その表面にマットの腰羽目を取りつけてあり、さらに供物棚がつくられていた。墓室の北寄りにおかれた木台に、頭を西にした王妃が手を胸の上に組合せて仰臥伸展葬され、3人の随葬者が頭部と脚部と南西壁の中央部とに認められた。王妃は髪飾、腕環、胸飾などすばらしい装飾品をつけていた。室内には金、銀、銅、石製の容器類、塗料をいれる貝、ランプなどの副葬品が墓室の壁にそって積上げられていたが、その配列に特別な考慮は払われなかったようである。

**1054号墓**<sup>36)</sup> (第3図) 10.7×8.4 m、深さ10 mの竪壙で、前記の3王墓と違って、墓室を中心とする下部と死坑を含む中間構造の上部とから構成されている。竪壙底の中央、北西よりに墓室があって、前の広場に犠牲に供せられた人間と動物の遺骸があり、入口から北東へ墓室の壁にそって鉢と壺が並んでいた。竪壙の南西側面には、竪壙底から少しうえのところに、低い練土の壁が竪壙壁にそって走っており、墓室と北東側壁との間には、丸い陶製の排水器がある。竪壙底から墓室の壁の高さまで詰められた練土の上に、動物の骨と土器とが混在している。火を焚いて死者を祭ったと思われる残滓が4ヵ所ある。その上は粘土と煉瓦片で固く埋立てられているが、大きな陶盤が1個ふせられ、なかに常食物を盛った皿が数個あった。盤上には瀝青が不規則に広がっていた。

中間構造というのは、下部の最上層を足場として、練土でつくられた厚さ約1 mの周壁の中に、犠牲者と供物を交える埋土が層をなして詰められたものである。北西から南東に6 mの間隔を置いて走る2つの壁がもっとも深く、約1.8 m上に北東から南西に走る壁がつくられて、1つは平行する両壁を北西端で連結し、他の1つは北西端から南東へ3.5 mにあって、この空間を北西室と南東室に二分していたと考えられるが、南東室は破壊されて残存せず、北西室は少し上にある壁でさらに二分されている (I, II)。



室内は下から9層まで両室とも共通であって、(1) 純土層 (2) 動物の骨の入った土層と灰の層 (3) 純土層 (4) 表面が固められている黄色粘土層 (5) 表面が固められていて、犠牲者 D とまわりの土器を含む層 (6) 表面を泥土で塗固めた灰と土器片の混土層で犠牲者と土器がある (7) 動物の骨、多数の供物用土器、犠牲者 A を含む混土層 (8) 粘土の煉瓦片の層で、I 室の下では上層に達する土器が立っている (9) 柔らかい土の層がある。10層から両室を区分する壁が



第3図 Ur 1054号墓のSW-NE断面図  
(Ur Ex. II, Fig. 16による)

始まって、その構成が大分ちがってくる。I 室では煉瓦片の最下層は8層の土器で切れ、薄い雑土の層をはさんで殉葬者を埋葬した木棺 2、黄金の短剣 2 本を入れた木箱、容器を含む層がある。北隅の木棺は盗掘されていたが、それと直交する木棺の主 C は装身具と豊富な副葬品とを伴っていた。その上には赤い焼土と灰の層がある。II 室では9層の上に殉葬者 B が豊富な副葬品とともに木棺に葬られ、側に犠牲者が1人よこたわっていた。

墓室は不整形な石灰岩を積上げてつくった厚い壁のうえに、頂部を笠石でふさいだ dome の天井を載せていて、南東壁に入口がある。被葬者の上に残っていた木の枠組から、墓室には天井板を張っていたものと考えられる。床は煉瓦を粗雑に敷きつめてあって、壁の重みで高くなった中央の床下には排水管を埋めてある。墓室には遺骸が5体認められた。その位置からいって、中央の女性が主人と考えられる。800号墓と同じように棺はなく、被葬者は頭を西に、南向きの屈葬の姿勢で、装飾品をまとい、手に黄金製深鉢をもって、砥石、短剣、黄金製印章などとともに、前に3人、頭部に1人の供を従

## Mesopotamia における帝王陵の成立

えて葬られていた。容器類は主人のまわりと墓室の東隅と西隅に多かった。

さて、これらの王墓に共通した性格として、宏大な竪壙をほり、その一部につくられた煉瓦あるいは石灰岩づくりの墓室と、主人に従う多数の随葬者をうずめた死坑とから構成されているという点が認められる。しかし墓室と死坑の位置関係からいえば、789号墓では墓室と死坑が同平面にあり、779号墓は両者が別につくられ、1054号墓では上下の関係に位置しているという差異がある。800号墓は789号墓に似た特殊な例と考えられる<sup>37)</sup>。さらに遺物についてみても、779号墓、789号墓、800号墓は車とそれを引く動物やリラを伴っているのに対して、1054号墓ではこの種のものが発見されないというように、この両者の埋葬法には、かなり明確な違いがあるように思われる。埋葬法が違うということは、葬送儀礼の相違として理解される。Woolleyが考えた王墓の葬礼<sup>38)</sup>を参照しながら、それぞれの場合について葬送の儀礼を復原してみると次のようになるであろう。

789号墓では、まず宏大な竪壙を掘下げて、壙底の一部に墓室をつくる。戦車に乗せられて壙道から運ばれてきた王の屍体が墓室に安置されると、3、4人の従者が多数の供物や副葬品とともに埋葬され、入口が閉鎖されて第一段階が終る。次に葬列に参加した幾人かが壙底で毒を仰いで犠牲となり、葬送に使用した戦車とともに葬られる。埋土がある高さで達すると灌奠を捧げて儀式を行い、竪壙を埋立てて終る。

1054号墓の場合は、壙底の中央に墓室をつかって主人と従者を葬り、供物を捧げて墓室を閉鎖し、墓室の前で供儀して埋立て始める。墓室の側壁の高さまで達すると、埋立てを中止して表面を粘土で固め、灌奠と供物を捧げ、火を焚いて儀式を行う。その上を粘土と煉瓦片で埋立て、ふたたび中止して儀式を行い、粘土で表面を固めて下部の儀式が修了する。今度は煉瓦の壁で部屋をつかって、埋立てと供儀を繰返し、最後に高官を殉葬して床面に供物を並べ、その部屋をマットで葺いて上部の儀式が終る。そして竪壙が地表まで埋立てられる。

このような葬送儀礼の推測が合理的であるならば、789号墓では葬礼が比較的短期間で終わったと思われるのに対して、1054号墓の場合は、竪壙上部に室を設けて犠牲者ともなう供養と埋立てとが繰返されるというように、はるかに長期間を要したものと思われるのである。これを2つの異なった葬法の様式と考えたい。そうすると、779号墓は789号墓のように大きな死坑をもちながら、1054号墓と同じように墓室の上で小規模な供儀をおこなっているから、両様式の間隔的なものと考えられる。墓室上の供儀の規模

がはるかに小さいのも、中間的な性格として理解される。

この2つの様式と対比して、他の王墓の性格を検討してみよう。777号墓<sup>3)</sup>は壁壙の底全体に、2部屋からなる墓室をつくっていて、779号墓に似ている。戦車が発見された580号墓<sup>40)</sup>をこれに付属する坑と考えると、両様式の中間形になる。1236号墓<sup>41)</sup>も4室をもつ墓室があり、337号墓<sup>42)</sup>の死坑が付属すると779号墓と同類である。しかし壁壙上部に死坑をもっていて、1054号墓式にいっそう近い。1050号墓は<sup>43)</sup>、40体をもつ死坑が墓壙の下層にある点で特異な存在であるが、中間構造のあり方からいえば、1054号墓式に属するものと認めてよい。規模の小さい1618号墓、1631号墓、1648号墓の3墓<sup>44)</sup>では、1618号墓が中間構造をもっており、1631号墓と1648号墓は墓室の前に庭があって動物が供犠されている。これらの点から、この3王墓は1054号墓に類似した特異なものと考える。

これらの王墓が墓地内で占める位置に注目すると、789号墓式の一群が墓地の北東部にあるのにたいして、1054号墓式は、779号墓のような中間形を中にはさんで、中間形でも1054号墓式に近い1236号墓とともに、墓地の中央から南西部に位置し、1054号墓式の中でも特異な一群は、さらにその南西にあることが認められる。このように類似した葬法の墓が近接してあるということは、それぞれの王の埋葬地を選択するに当って、墓地の北東から南西へか、あるいは南西から北東へのいずれかの方向を取るといふ、一種の順序があったものと考えてよい。このことは、葬法の様式が789号墓から1054号墓へと変化したか、あるいはその逆のどちらかであったことを示している。

Woolleyは南西から北東への順を想定した。この順序だと1054号墓が古くて、789号墓式が新しいことになる。かれが根拠としたのは墓室天井の架構法であって、それは次のような発達過程をたどるものと考えた。すなわち、1236号墓 A、D 室の corbel vault から、779号墓 A、D 室の、石をせり出して少し内側に傾斜させ、頂部に笠石を兼ねた楔石をおく進歩した vault をへて、789号墓の完全な barrel vault にいたる過程である<sup>45)</sup>。この外に墓室構築の材料が石から煉瓦へ、壁装飾の材料が漆喰から泥へと変化するものと考えて、1239号墓は古く、789号墓は新しいとする<sup>46)</sup>。しかし corbel vault は、後で述べる Ur 第三王朝でも使用されているから、逆の順序を想定することも可能であり、構築の材料は入手の難易に左右されることが多い<sup>47)</sup>ので、時代の前後を決定する根拠とはしにくいものである。

このように、Woolleyの想定した埋葬順は信用するにたる根拠がない。別の観点から、王墓の埋葬順は789号墓式から1054号墓式へであったと考えられる。先に述べたよう

## Mesopotamia における帝王陵の成立

に、初期王朝Ⅰ期には王の葬送に車を使用して、それを墓にうずめる風習があった。この風習が、Ur の墓地では 789 号墓式の葬法に確認されているのであるから、この葬法はⅠ期に属する Kish の葬法の伝統を継承したものであり、したがって 1054 号墓式に先行すると考えてよいと思う。Kish の王墓では、戦車、数人の犠牲者、副葬品などすべてが墓室内に葬られていたのに比べると、Ur の場合は、墓室内に犠牲者と副葬品が葬られているのみならず、戦車、副葬品、多数の犠牲者を収めた死坑をも有する点で、遙かに大規模な葬礼を思わせるが、なお同様式の複雑な様相と考えられる。この観点からすると、墓地は北東から南西へと使用され、葬法の様式は 789 号墓式から 779 号墓、1236 号墓をへて、1054 号墓へと変化していったものといえることができるであろう。この新たに登場した 1054 号墓式の葬法こそ、さらに変形された形であるが、後世の王によって採用された葬法なのである。このことから前述の推測の妥当性が認められると思う。

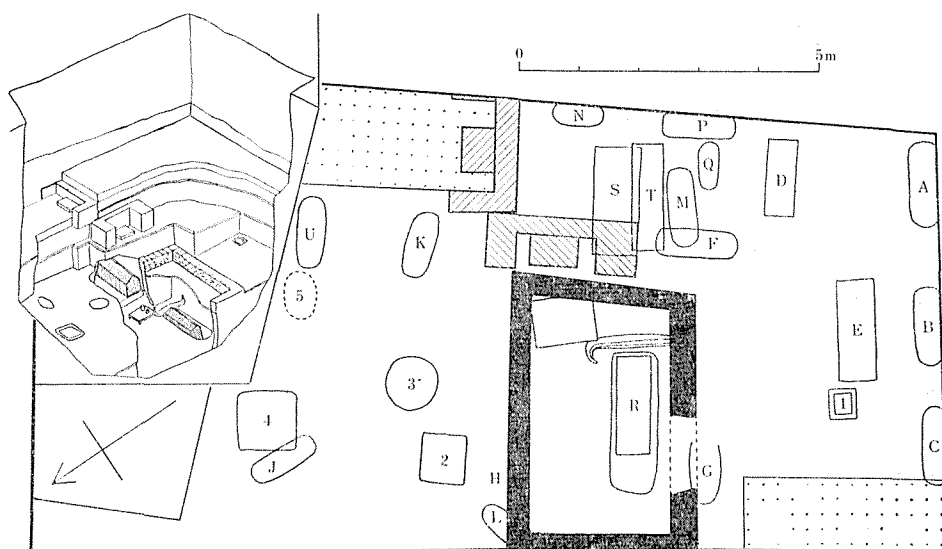
編年的に、前述の王墓の次におかれる王墓は 5 基あって、便宜的に Ur 第二王朝期とされている<sup>48)</sup>。そのうち構造が最もよく残っていた 1847 号墓<sup>49)</sup>(第 4 図)は 15.5×7m、深さ 6m の南北に長い大きな竪坑で、坑のほぼ中央に煉瓦の低い壁が方形に廻らされ、そのなかから動物の遺骸、歯、炭化した穀物、動物の土偶などを出土していて、この構造が供物台であったことを示している。その下に、木枠に葦を巻いた棺が泥固めの坑底にほられた浅い凹みの中に据えられていた。近くに瀝青のボート模造品、葦製の台があって土器がころがっていた。R とその東にある S と T がほぼ坑底に埋められたもので、他の ABC などの 16 体は埋立中に葬られたものである。前述の方形壁と同じ高さに床があって、5カ所に火を焚いた跡が認められた。その上に煉瓦の層があって、中に 3 体の犠牲者が葬られていた。煉瓦の層の上に小さな祭壇のある壁龕が北西向きに、さらに一段高いところで北東向きに設けられ、煉瓦を交えた詰物の層がそれらを覆っていた。

R は埋葬状態から主葬者と考えられる。それは装身具をつけ、棺内に銅斧、銅容器、土器、棺外に三叉戟、銅剣、銅容器、土器などを伴って葬られていた。R がいでは S と T が比較的豊富な副葬品もっているだけで、他は貧弱である。

この墓は墓室が構築されていないばかりでなく、前述の王墓に比べると副葬品も一段と見劣りがするが、中間構造があって犠牲者が葬られていること、供物台があり、火を焚いて儀式を行った跡が認められることなどから、第二王朝期の王墓は 1054 号墓式の葬法を継承したものといえるであろう。

第一王朝以前の王墓も第二王朝期の王墓も地上に建造物をもたなかったようである。その痕跡さえ発見されていない。このことは Woolley が考えたように<sup>50)</sup>、後世の相重なる埋葬のために祠堂が破壊された結果と考えられないこともない。しかし789号墓の竪壙と800号墓の竪壙とが全く重なっていることや、ほぼ同時期の民衆の墓が王墓の上にある事実から考えると、たとえ建造物があっても、墓室を含む地下の構造に比べて極めて簡単な、短時日のうちに消滅するような建物であったろう。すなわち Ur の王墓は全体として地下に、換言すれば埋葬の際の儀式に重点がおかれていたということができると思う。その葬送儀礼が長期間化する傾向を王墓の構造の変化から読みとることができた。この動きが第二王朝期の王墓では祭壇となり、さらに永続的な祭壇をもつ建造物が地上に造営されたのが、次にのべる Ur 第三王朝の帝王陵なのである。Ur の王墓群では、第二王朝期のそれをも含めて新たな葬送儀礼へ変形する過程が認められた。これは初期王朝期の末から Akkad 王朝期の初期にあたるのである。

王墓の構造上の変化は、同時に王墓が営造された墓地の性格の変化をともなっていたと推測される点がある。Kish Y 地区の墓地<sup>51)</sup> から、何基の墓が発見されたか明らかでないが、688号墓という番号がつけられているところをみると、この墓地にも相当数の墓があったのであろう。そうすると、大きな墓地のなかに、前述の3王墓が混在して



第4図 Ur 1847号墓 (Ur Ex. II, Fig. 60 a とPl. 82b による)

#### Mesopotamia における帝王陵の成立

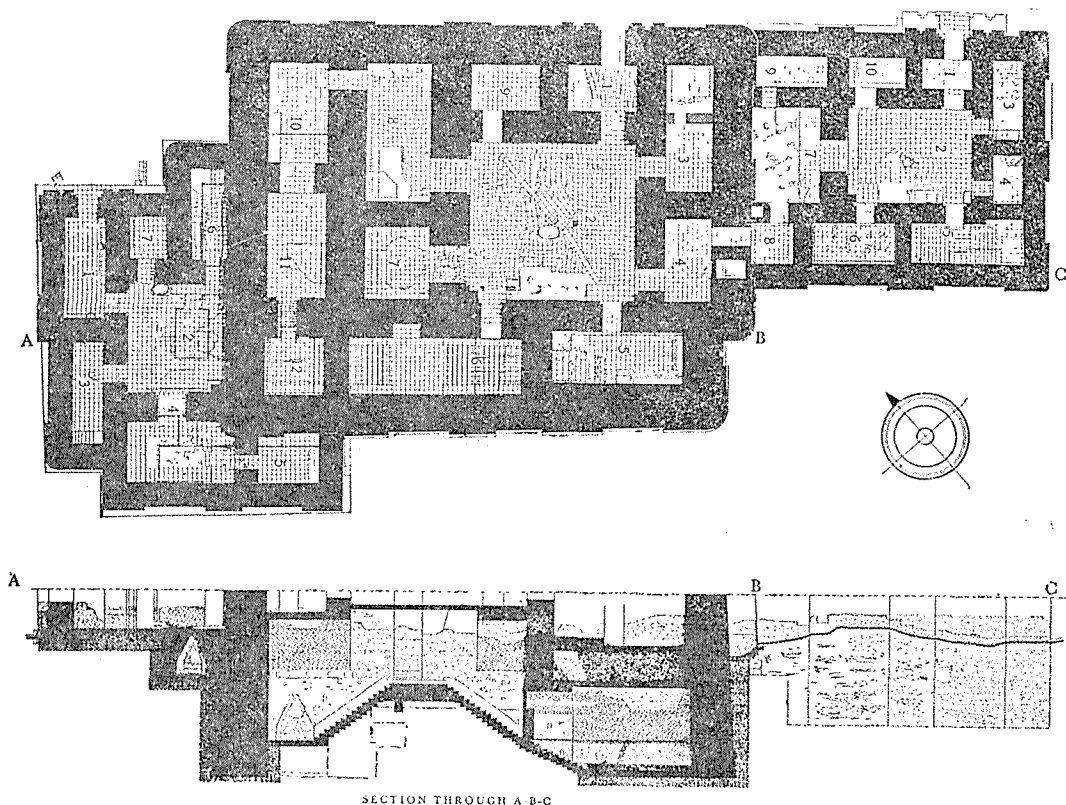
いたことになる。しかも王墓と他の墓との間には、大きな差がなくて、王墓は副葬品が多く、犠牲者や戦車を伴っているところに、その差が認められたにすぎない。

王墓が一般の墓と同じ墓地に葬られている点は、Ur の墓地においても同じであった。Ur の墓地では、さきに述べたように、王墓と一般の墓との間に構造上にも著しい差が認められたけれども、第一王朝以前の時期には、なお多数の民衆の墓が、王墓と墓地を共有していたようである<sup>52)</sup>。構造の分る墓だけでも 700 以上ある。これが第二王朝期のものになると、王墓以外の墓は、わずかに 10 を数えるだけである<sup>53)</sup>。この地点は Ur 第三王朝の帝王陵に近いために、帝王陵の造営にさいして破壊された墓がいくつかあったであろうが、それにしても第一王朝以前の数に比べると遥かに少い。王が埋葬される墓地において、民衆の墓が少くなりつつある事実は、この時期に王占用の墓地が形成されつつあったと考えられる。帝王陵は、この傾向をいっそう助長させたもので、王の埋葬所を聖域として他と区劃する意味をもっていたように思われる。

### 4 帝 王 陵

この帝王陵<sup>54)</sup>(第 5 図) は、いわゆる王墓地の北東にある。地上に煉瓦造りの大きな礼拝殿をもち、しかも 3 つの建造物の結合体であって、前述の王墓とはまったく構造が違っている。Dungi 銘のある主建造物が中央にあり(中陵)、その北東隅(東陵)と南西隅(西陵)とに、かれの子 Bur-Sin の銘をもつ建造物が増築されたものである。建造者の銘からいって中陵は Ur-Nammu、東陵は Dungi、西陵は Bur-Sin が葬られたものと考えられている<sup>55)</sup>。

陵の中核をなす中陵は 35×27 m の長方形のプランをもち、瀝青を用いて焼成煉瓦を積重ねた厚さ 3 m にも達する壁で建造されている。構造は大体において住宅建築を模したもので、入口から煉瓦敷の玄関(1)を通過して広い中庭(2)に入ると、その南西壁には祭壇、中央には洗浄用の terra-cotta 製浴槽があって、ここが建物の中心であると同時にまわりの部屋への通路になっている。5、8の両室にも祭壇があり、6室は墓室への階段となっている。その他の室は用途がわからないが、4、8、9の各室から lapis lazuli や瑪瑙を象嵌した装飾品、細金細工などの残片が発見されたことは、往時の室内装飾が豪華なものであったことを示している。墓室は祭壇のある 5室と 11室との下であり、6室の中央にある踊場から両側に降りる階段を通過して入ることができる。両墓室ともに長方形で 2室の床面から数メートル下に墓室の床がある。床は幾重にも煉瓦を敷き、



第 5 図 Ur 第三王朝の帝王陵 (Ex. at Ur, Fig. 10 による, 1/500)

天井は corbel vault 式に架構されている。完全に盗掘されていて、人骨と土器片が散乱していた。両墓室に人骨が認められたことは、いずれか一方が殉葬者であったと考えられる。東陵は中陵を小規模にしたもので、墓室には Ur-Nammu が Gilgamesh に捧げた銘文のある大理石杯の破片と人骨が残っていた。西陵のプランは他の 2 陵と異なっており、墓室も小規模で浅く、羨道に階段もない簡単なものであるが、構築上の手法は同じである。

各陵ともに、祭壇が豪壯な建造物の中央玄関の正面に設置されている。そして墓室と祭壇をもつ地上の建造物とは一体である筈なのに、墓室の煉瓦積と拜殿のそれとの間には、構築のさいに生じたと判断される食違いが認められるという<sup>50</sup>。この食違いが生じた理由を、埋葬後ある期間、仮の建物で葬礼が行われてのちに、現在みられるような煉瓦建造物が営造されたことに求めるならば、この王陵の埋葬直後の葬礼は 1054 号墓および第二王朝期の伝統を継承したものであって、祭壇をもつ拜殿を建造したのは、この様

## Mesopotamia における帝王陵の成立

式を一段と発展させたものと考えられる。なお文献によると<sup>57)</sup>、Ur 第三王朝時代にも、王の葬送に車が使用されていたようである。779 号墓では車が墓壙の外に埋められており、1054号墓と第二王朝期の王墓にも車はみられなかった。中陵と東陵の羨道は階段になっていて、車では入れそうにもない。新しい葬法では、Kish の王墓や Ur の 789 号墓とは異なった車の取りあつかいをしていたのであろう。

## 5 帝王陵の成立と王の神格化

Mesopotamia における王墓の変遷は、次のように要約することができる。初期王朝期の王墓は民衆の墓と共存しており、地上に永続的な礼拝所をもたなかったようである。初期王朝末期になると、王の葬送儀礼が長期化する傾向が認められ、それがさらに発展した結果として、Ur 第三王朝の帝王陵の拝殿を見ることができた。帝王陵の時代と Ur 第二王朝の王墓は、編年的に間隔があり、両者は構造的にも、なお直接に連絡しない点が多いので、Ur 第三王朝いぜん、拝殿をもつ帝王陵がすでに成立していたかも知れない。後に述べる理由によって、その可能性がむしろ強いと思われるが、ともかく初期王朝末期から Ur 第三王朝期にいたる間に、墓上に永続的な礼拝所を設置し、壮大な建造物をつくって墓域を劃するという形式が案出されたものと考えられる。

このような変化を帝王陵の成立過程とみるならば、墓の構造や副葬品に異なった形式をもちながらも、Mesopotamia に類似した変化が Egypt でも認められるように思う。Egypt の Naga-ed-Dêr<sup>58)</sup> や Saqqara<sup>59)</sup> にある第一、第二王朝期の墓地では、王墓である Mastaba<sup>60)</sup> が民衆の墓とともに同じ墓地に営まれていて、王墓を営造するための地域をとくに区劃していた形跡は認められない。このことは Egypt 第一王朝期の Mastaba が扶壁の手法によって装飾的な外装を有するにもかかわらず、礼拝を行うための設備については考慮が払われていないことと関連している。第二王朝期になると、装飾的な扶壁の退化と並行して、Mastaba の正面の両端に niche がつくられ、第二王朝末期から第三王朝期にかけて、南の niche がとくに発達し、礼拝所が設けられるという変化が認められている。第三王朝の Zoser を葬った階段式 Pyramid<sup>61)</sup> が大規模な葬祭殿をもち、ここに被葬者である王の巨大な像を安置したのも、この動向を継承しながら飛躍的に規模を大きくした結果と考えることができよう。この Pyramid は葬祭殿ばかりでなく、石積の Mastaba、30 年祭儀式殿、その他の諸建造物をともなっており、さらにこれらを囲む壁をめぐらして陵域を劃し、いわゆる Pyramid 複合体を形成



## Mesopotamia における帝王陵の成立

している。この複合体内での諸建造物の配列に一定の秩序ができ、流域祭殿が付加され、Pharaoh の墓としての定形が確立されたのは、第四王朝の Cheops あるいは Chephren の Pyramid においてであったけれども、階段式 Pyramid の成立は、王墓発生いごにおける劃期的な変化であったと考えられる。

Egypt においても Mesopotamia と同じような王墓の発展が認められるとするならば、実年代では Egypt の方が古いのである<sup>62)</sup> から、Mesopotamia における王墓の変化は Egypt からの影響によって生じたのではないかということが問題になる。実際に、Ur の墓地は Egypt からの影響によって成立したと主張した学者がある。それは W. J. Perry<sup>63)</sup> であって、Ur の墓地は Egypt から墓地を営む風習そのものが伝わったことによって起ったという。前に述べたように、Ur の墓地は Mesopotamia における王墓の変化を論ずるばあい、最も重要な時期に当たっているので、Perry の主張の根拠を検討してみたい。

かれは、次のような理由をあげて、Ur に影響を与えたのは Egypt 第二王朝の墓制であると主張した。Egypt 第二王朝期の埋葬法と Ur 墓地のそれとを比較すると、遺骸をマットで包むこと、陶棺、木棺の存在、corbel vault 架構法、墓室の構築に石を使用すること、とくに大きな墓に墓道があること、木で天井を覆っていること、埋葬に階層的な差別があることなど、共通した要素がひじょうに多く、相違点といえば、Ur では焼成煉瓦を使用し、arch 架構法があるのに、Egypt ではそれが発見されていない点くらいのものだという。また Ur の墓地から発見された副葬品、金、銀、銅、琥珀、lapis lazuli、紅玉髓の製品、凍石製、方解石製の容器、孔雀石、文字のある tablet、象嵌細工、紋章形意匠、幅のひろいのみ、斧、槍、mace-head、円筒印章などは Egypt の先王朝期を通じて累積的に増加していった品目と同じであって、Egypt の墓制の発達過程のなかでは、第二王朝末のものがこれによく似ている。Egypt では、その後も引続いて墓が発達してゆくのに、Ur では墓地の発達はみられない。したがって、Ur の墓地は Egypt 第二王朝末の影響をうけて成立したものであると結論した。

しかしながら、これらの類似点の認識は粗雑であって、賛同しかねることが多い。例えば、Egypt では木で墓室の天井をつくり、Ur では煉瓦構築の天井の下に板を張った例があるという事実を、「木で天井を覆うこと」に類似性が認められる<sup>64)</sup> と判断している。同質の材料を使用している、その機能はまったく異なっている。また Ur では地上に建造物が残存していないのに、元来あったであろうとする Woolley の推測<sup>65)</sup> を根拠として、Egypt の上部構造と比較し両者が似ているという。副葬品に金銀が使用され

## Mesopotamia における帝王陵の成立

ているとしても、Egypt の例にあげられた Naga-ed-Dêr では、金銀は装身具のみに用いられている<sup>66)</sup>のにたいして、Ur では装身具がいかに容器や刀装具にも使用され、そのうえ装身具の形は少しも似ていないのである<sup>67)</sup>。さらに Perry が Egypt 人の発見として列挙した品目のうちで、文字、紋章形意匠、円筒印章などは逆に Mesopotamia から Egypt に影響を与えたと考えるのが、今日では常識である<sup>68)</sup>。Perry が挙げた根拠を検討してみると、現存の資料からは Mesopotamia の墓制が Egypt に由来することを証明する材料は何もないと考えてよい。したがって、Mesopotamia における帝王陵の成立の動機は自生的なものであったと考える。

王墓の構造上の変遷をみると、墓上に礼拝所をもたなかったものから、葬送儀礼が終ったのちにも、墓上で死者を祭る設備としての礼拝所が設けられるようになったことが認められた。このことは、すべての墓が必ずしも被葬者を永く後世まで祭ろうとする意図から営造されたものでなくて、死者を彼岸に送った人びとの間に、埋葬後も死者を祭る必要が生じたとき、従来、単に永遠の住家としてつくられていた墓が、そのうえに礼拝のための設備を加えて営造されるにいたったことを示している。Mesopotamia でこの変化が確実に具体化したのは、上述のごとく Ur 第三王朝である。

このような変化を自生的なものと考え、帝王陵に葬られた Ur 第三王朝の諸王が神を自称したという事実が<sup>69)</sup>、この変化の意味について説明してくれるのではないかと思う。Mesopotamia の王の称号についてみると<sup>70)</sup>、初期王朝期には、各都市の首長は Sumer 語で ensi, Akkad 語で ishaku とよばれて、神意を代行するものと考えられていた。ところが Akkad 王朝になると、王は神を称し、Ur 第三王朝の王はこれを継承したといわれる。称号ばかりではなく、Tell Asmar においては、Ur 第三王朝の Gimil-Sin を祭った神殿が発見されている<sup>71)</sup>のである。この点から、王の神格化が、地上に壮大な礼拝所を有する帝王陵の成立を導きだしたのではないかと考える<sup>72)</sup>。Egypt でも第三王朝の Zoser の大きな彫像が、階段式 Pyramid の葬祭殿の Serdab に安置された事実<sup>73)</sup>は、Mastaba の時代とは異なった意味づけをもって、被葬者が礼拝の対象になったことを物語っているように思う。古王国になると Egypt の王も神という称号を加えるようになったといわれる<sup>74)</sup>。

ところが、これに似た現象は中国においても見られる。殷の王墓<sup>19)</sup>と周初の大墓<sup>75)</sup>は小墓と同じ墓地に営まれて、しかも墓上に何の標識も残していない。戦国時代になると、金村古墓<sup>76)</sup>のように墓上に標識が認められなかった王墓級の墓もあるが、寿県李三孤堆<sup>77)</sup>のように、相当大きな盛土がつくられており、輝県の大墓<sup>78)</sup>では、土台を構築し

て祠堂を建ててあった跡が発見された。さらに前漢になると、巨大な墳丘の上に寝殿を建て、周垣をめぐるして陵域を劃し、陪冢をしたがえているという陵墓の制<sup>79)</sup>が完備してくるのである。前漢の前に中国最大の帝王陵を築いた秦の始皇帝は、もともと天上の主宰者を意味していた「皇」と「帝」とを結合して「皇帝」と称し、漢代いご皇帝政治の理念が踏襲されたといわれる<sup>80)</sup>。

Mesopotamia の帝王陵は煉瓦で構築され、Pyramid は石塊を積んでつくられ、中国の帝王陵は大量の土を盛ることによってできているごとく、その形式にはそれぞれ特徴があり、礼拝設備もまた独自の構造をもっていた。帝王陵に埋葬された支配者たちが、神あるいはそれに類した称号を取ったといっても、その性格や内容に差があることは、帝王陵の形式に差があるのと同じであろう。しかし、帝王陵の成立期が、いずれの地域においても、古代統一国家の形成期にあたっていることは見逃してはならない事実である。

Mesopotamia の帝王陵は、発見された例がわずかに1基である。地上の建造物が残っていない Lagash の例<sup>81)</sup>を加えても2例にすぎない。王墓が発見された墓地も Kish, Mari, Ur の3ヵ所である。しかしながら、発見例が少いという理由から、単純にそれらを例外的な存在と考えるならば、現象を正しく理解していないことが多い。以上に考察したことも、その1つであることを強調しておきたい。これは Mesopotamia 文明の性格にも関連してくる問題だからである。Mesopotamia においては、来世が軽視されていたという観点から、Egypt と違って墓に重要性を認めなかったといわれ<sup>82)</sup>、Egypt の王墓や Pyramid に比すべき記念建造物として、神殿や Ziggurat が対比されている<sup>83)</sup>。そして文字、芸術、社会構造などについても Mesopotamia のそれは神殿中心であり、Egypt のそれは王中心であるというように、両文明の差違がこの事実を背景として、強調されてきた。現存の目につきやすい資料からみると、両文明の性格には、この差が確かに認められるが、Mesopotamia の帝王陵の成立を検討してみると、その差違というのは、一般に強調されているほど著しいものではないように思われる。

(筆者は京大文学部助手)

#### 註

- 1) この論文の作製にあたって、梅原教授から貴重な書物を拝借した。感謝の意を表する。
- 2) 日本の場合、天皇陵と地方豪族の墳墓とを劃然と区別することはほとんど不可能であるが、古墳時代の各時期について大きな墳墓をとれば、天皇陵はそのなかに含まれているものとみて差支えはなかろう。
- 3) H. Frankfort: *The Art and Architecture of the Ancient Orient* (The Pelican

Mesopotamia における帝王陵の成立

History of Art), Harmondsworth, 1958, pp. 50-53.

- 4) S. Smith, Fr. M. Th. Böhl, O. Menghin, H. Frankfort, S. Lloyd, E. S. Speiser, A. Moortgat, H. Schmökel などがある。この考え方が誤っていることについて、1961年3月に京都大学大学院博士課程単位修得者研究発表の席上、「ウル「王墓」の被葬者について」という題目で発表したことがある。詳細な点については別の機会に譲りたい。
- 5) 最近、S. N. Kramer が文献のなかにも、来世にかんする記載や葬送の場面を復元できる記述があることを指摘している。Kramer: *Death and Nether World according to the Sumerian Literary Texts* (Iraq XXII, 1960, pp. 59-68).
- 6) C. L. Woolley: *Excavations at Ur*, London, 1954, p. 77.
- 7) *Ibid.*, p. 55.
- 8) Mesopotamia における王墓の出現の意義をとくに強調したのは、V. G. Childe である。Childe: *The Most Ancient East*, London, 1929, pp. 191-194; *Directional Changes in Funerary Practices during 50,000 Years* (Man, Vol. XLV, 1945, No. 4).
- 9) M. E. L. Mallowan: *Memoires of Ur* (Iraq Vol. XXII, 1960, pp. 12, 13). Woolley は遺著で Ur の王墓を Ur 第一王朝の諸王の墓にあててあるが、その根拠は示されていない (L. Woolley: *Mesopotamia and the Middle East*, London, 1961, pp. 46, 236. )。
- 10) C. J. Gadd: *The Spirit of Living Sacrifices in Tombs* (Iraq XXII, 1960, pp. 51-58).
- 11) L. Ch. Watelin: *Excavations at Kish*, Vol. IV, Paris, 1934.
- 12) H. Frankfort: *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* (JRAS), 1937, pp. 330-341.
- 13) Childe: *New Light on the Most Ancient East*, 4th ed., London, 1952.
- 14) H. Frankfort: *Ibid.*, pp. 341-343; *Kinghip and the Gods*, Chicago, 1948, p. 400 n. 12.
- 15) Woolley: *Ur Excavations*, Vol. II, *The Royal Cemetery*, Oxford, 1934 (以下 Ur Ex. II と略す), p. 32.
- 16) *Ibid.*, pp. 135-180.
- 17) *Ibid.*, pp. 33, 34.
- 18) G. A. Reisner: *The Development of the Egyptian Tomb down to the Accession of Cheops*, Cambridge, 1936, Fig. 58.
- 19) 梅原末治: 河南省彰徳府外侯家荘古墓群の概観 (宝雲 第29冊, 1942, pp. 25-44).
- 20) Frankfort: JRAS, 1937, p. 337; P. Delougaz: *Pottery from the Diyala Region*, Chicago, 1952, p. 137.
- 21) Woolley: *Ur Excavations*, Vol. IV, *The Early Periods*, Philadelphia, 1955, pp. 24-

- 26, 103-126, Pls. 1, 54-55, 78.
- 22) Ibid., p. 123, Pl. 8b.
- 23) Watelin: Kish IV, pp. 18-30.
- 24) Ibid., pp. 30, 31, Pl. XXIII 1, 2, Fig. 3.
- 25) R. de Mecquenem, G. Conteneau, R. Pfister, N. Belaiew : Archéologie Susienne (Mémoires de la Mission Archéologique en Iran, Tome XXIX), Paris, 1943, pp. 103, 104.
- 26) Ibid., Fig. 79.
- 27) Delougaz : Pottery from the Diyala Region, Pls. 62, 138, pp. 69, 70.
- 28) Childe : New Light on the Most Ancient East, p. 146. ただし Louis Le Breton : The Early Periods at Susa, Mesopotamian Relations (Iraq XIX, Part 2, 1957) によれば、この土器は Dc に細分され、Mesopotamia の初期王朝Ⅱ期からⅢ期初頭に並行する時期だといわれる (pp. 115, 124, Pl. XXVI)。
- 29) Woolley : Ur Ex. II, p. 57.
- 30) Ibid., pp. 57-62. この王墓と 777 号墓, 1236 号墓の 3 王墓は、大きな墓室をもちながら、789 号墓, 800 号墓, 1054 号墓にあった死坑がない。一方 337 号墓, 580 号墓, 1237 号墓, 1332 号墓は死坑だけで墓室がない (第 1 図)。Woolley は、死坑だけのものは墓室が破壊されたものと推測しているが、これらの死坑はおそらく墓室のある墓のどれかに付属するものであろう。どの死坑がどの王墓に属するかを決定する積極的な証拠はないが、その位置からいって、779 号墓には 1237 号墓が、777 号墓には 580 号墓が、1236 号墓には 337 号墓が付属するものと考えたい。1332 号墓は決定し兼ねる。
- 31) Ibid., pp. 446, 447. Woolley は独立した王墓であったかもしれないと考えている。
- 32) Ibid., pp. 113-124.
- 33) Ibid., pp. 107-111.
- 34) Ibid., pp. 62-71. A-bar-gi という名前は、王妃 Shub-ad の墓といわれる 800 号墓の死坑から発見された円筒印章の銘によったもので (Ibid., p. 81), これがこの墓の主人公の名前であるかどうか確かではない。
- 35) Ibid., pp. 73-91.
- 36) Ibid., pp. 97-107.
- 37) Ibid., pp. 72, 73.
- 38) Ibid., pp. 34-37. Woolley は、王はすべて同じ葬礼に基づいて葬られたものと考えて、王の葬送儀礼を復原した。789 号墓, 800 号墓は埋葬の第二段階すなわち犠牲者が葬られる状態を最もよく示し、1054 号墓はそれ以後の埋葬法をよく説明しているという。しかし、これは葬礼の違いを示していると考えの方が妥当である。789 号墓や 800 号墓の壙には、幾層にも

Mesopotamia における帝王陵の成立

なった供養は認められないからである。

- 39) Ibid., pp. 53-57.
- 40) Ibid., pp. 46-53.
- 41) Ibid., pp. 111-113.
- 42) Ibid., pp. 43-46.
- 43) Ibid., pp. 91-97.
- 44) Ibid., pp. 128-134.
- 45) Ibid., p. 233. 後に述べる(本論文 p. 19) 陵の墓室が corbel vault に架構されているので、この発達過程をもって、王墓營造の順を決定することは早計であることわりながらも、corbel vault と barrel vault が並行して使用されたと考えて、天井の架構法の発達過程から王墓營造の順を推測したいようである (Ibid., p. 57)。
- 46) Ibid., pp. 228, 229.
- 47) Kish Y 墓地の王墓も Mari の王墓も初期王朝 I 期のものであるが、Kish のはすべて煉瓦であり (Watelin: Kish IV, p. 18), Mari では板石を使用している (Childe: New Light, p. 149)。
- 48) 副葬品の形式学的研究から、第一王朝以前の墓と、Akkad 王朝期の墓との間にいれられたものであるから、Ur 第二王朝が支配していた時代の墓かどうかはわからない (Woolley: Ur Ex. II, pp. 30, 31; Ex. at Ur, p. 110)。Frankfort は Akkad 王朝期の初期に編年している (JRAS, 1937, p. 337)。
- 49) Ur Ex. II, pp. 192-199. Woolley は報告書の Tabular Analysis of Second Dynasty Graves においては、この 5 墓を Square Pit となづけ (Ibid., pp. 482-485), その特殊な構造に注意して、王墓のうちでも 1050 号墓, 1054 号墓に類似していることを指摘しながらも (Ibid., pp. 31, 212), 王墓とは考えていなかった。しかし、その後に出版されたものでは、その構造の系統を Ur 第一王朝以前の王墓に求め、さらに王墓と Ur 第三王朝の帝王陵とをつなぐものと考えている (Excavations at Ur, London, 1954, p. 112)。
- 50) Ur Ex. II, p. 37.
- 51) Watelin: Kish IV, p. 17, Fig. 2, Pl. III.
- 52) 王墓は他のすべての墓に先んじて営まれたものと、Woolley は考えている (Ur Ex. II, p. 222)。王墓が一般の墓より深位につくられているが故に古いとする推測と、この地域が王家の占用墓地として使用されていた事実が忘れられてのちに、一般の墓が営まれたとする臆測とに由来する考え方である (Ibid., pp. 24, 222)。初期王朝期の墓地に二種類の別があったことは、Urukagina の円錐碑文から知られるが (中原与茂九郎: シュメール法について, 紀元二千六百年記念史学論文集, 1940, p. 741), 法規の内容からみると、高級墓地が王家に限られていたことは考えられない。

- 53) Ur Ex. II, pp. 482-485.
- 54) Woolley : Ex. at Ur, pp. 150-159; Figs. 8, 10; Pls. 19-21a; *Antiquaries Journal*, Vol. XI, pp. 345-359, Pl. XLV.
- 55) Ex. at Ur, pp. 150, 152.
- 56) *Ibid.*, p. 157; *Antiquaries Journal*, Vol. XI, p. 345.
- 57) S. N. Kramer : *Death and Nether World according to the Sumerian Litterary Texts* (Iraq XXII, 1960, p. 60); G. Castellino : *Urnammu three Religious Texts* (Z. A., N. F. XVIII (52), 1957) col. II, 33-34.
- 58) G. A. Reisner : *The Early Dynastic Cemeteries of Naga-ed-Dêr, Part I*, 1908; A. C. Mace : *The Early Dynastic Cemeteries of Naga-ed-Dêr, Part II*, 1909.
- 59) G. A. Reisner : *The Development of the Egyptian Tomb down to the Accession of Cheops*, pp. 48, 49, 192, Fig. 58.
- 60) 全部の Mastaba を王墓とよぶことには異論があろうが、この問題については別の機会に論ずる。Mastaba の変遷については W. B. Emery : *Archaic Egypt* (Pelican Book), 1961, pp. 128-164; I. E. S. Edwards : *The Pyramids of Egypt*, 1961, pp. 19-32 をみよ。
- 61) Edwards : *Ibid.*, pp. 33-49.
- 62) *Low Chronology* によると、Egypt 第三王朝の初まりが 2615 B. C. 頃、Ur の王墓の時期が 25 世紀 B. C. となる。Edward F. Campbell : *The Ancient Near East : Chronological Bibliography and Charts* (The Bible and the Ancient Near East, New York, 1961, p. 220).
- 63) W. J. Perry : *Sumer and Egypt* (Man XXIX, 1929, No. 18).
- 64) Reisner : *Naga-ed-Dêr I*, pp. 26-37; 本論文 p. 13 をみよ。Perry : *Sumer and Egypt*, p. 30.
- 65) Ur Ex. II, p. 37.
- 66) Reisner : *Naga-ed-Dêr I*, p. 117, Pls. 6-9.
- 67) Ur Ex. II, Pls. 127-141, 157, 160-164.
- 68) Frankfort : *The Birth of Civilization in the Near East*, Bloomington, 1951, pp. 100-111.
- 69) C. J. Gadd : *History and Monuments of Ur*, London, 1929, p. 122; Ur Ex. Texts I *Royal Inscriptions*, pp. 12, 16, 17, Pls. XII, XV, K, L; 中原与茂九郎 : 古代に於ける君主崇拜の意義——帝国主義的イデオロギーとして——(史林 17 卷 2 号, 1932, pp. 216-221).
- 70) 中原 : *Ibid.*, pp. 208-212; Frankfort : *Kingship and the Gods*, pp. 226-228.
- 71) H. Frankfort, S. Lloyd, Th. Jacobsen : *The Gimilsin Temple and the Palace*

Mesopotamia における帝王陵の成立

of Rulers at Tell Asmar (OIP Vol. XLIII, Chicago, 1940, p. 2, Pl. I).

- 72) そうすると、はじめて神を称号に用いたのは Akkad 王朝の王であるから、 Akkad 王朝期に帝王陵が成立していた可能性も十分にあるわけであるが、まだ発見されていない。そして Kish や Ur の王墓の被葬者が、都市の首長であるという確証もない。しかし墓の構造、とくに戦車による葬送は、かれらの葬礼にふさわしいやり方のように思われる。
- 73) Edwards : The Pyramids of Egypt, p. 40, Pl. 4.
- 74) J. H. Breasted : A History of the Ancient Egyptians, London, 1924, p. 74.
- 75) 郭宝鈞 : 涪県辛村古残墓之清理 (田野考古報告, 第1冊, 国立中央研究院歴史語言研究所專刊之13, 1936, pp. 167-200). これは構造からみて、殷の王墓の系統を引くものである。王墓とよんでもよいように思われるが、慣習にしたがって、ここでは大墓とよんでおく。以下の戦国墓の報告でも同じである。
- 76) 梅原末治 : 洛陽金村古墓聚英, 増訂版, 1943.
- 77) 李景昉 : 寿県楚墓調査報告 (田野考古報告, 第1冊, pp. 213-279).
- 78) 輝県発掘報告 (中国田野考古報告集, 第1集, 1956, pp. 69-109).
- 79) 足立喜六 : 長安史蹟の研究 (東洋文庫論叢, 第20の1, 2, 1933, pp. 79-108).
- 80) 宮崎市定 : 中国古代史概論 (ハーバード・燕京・同志社東方文化講座, 第8輯), 1955, pp. 28, 29; アジア史概説, 1948, p. 71.
- 81) A. Parrot : Tello, Paris, 1948, pp. 211-216, Pls. XXIV-XXVI.
- 82) S. Moscati : The Face of the Ancient Orient, London, 1960, pp. 52, 83.
- 83) Frankfort : The Birth of Civilization in the Near East, pp. 49, 51.